2020年メディア・アンビシャス

**大　賞**

　～受賞感想のしおり～



　表彰式

**表彰式　2021年3月6日（土）**

ZOOMによるオンライン方式

（協力：北海道大学東アジアメディア研究センター）

主な目次

選考概況：2ページ

受賞一覧：3ページ

受賞者から：4ページ以降

▶選考経過

今回選考対象とした作品は昨年1年間(2020年1月1日―12月31日)に発表された記事、ドキュメンタリーです。活字、映像の2部門に分けて会員から推薦を受け、ホームページから閲覧、視聴できるようにしました。そのうえで、1月初めの意見交換、中旬の映像の集中上映を経て、月末の最終選考会で投票・審査の上、各賞を確定しました。

**【活字部門】**オブザーバー会員を含めた推薦は新聞・週刊誌の記事に加え、ネット上のレポートも初登場し、総計37本を数えました。コロナ禍、安倍長期政権、核ごみ処分をはじめとした原発問題の記事が目立ちました。大賞となった「ヘイトスピーチ」（正式なタイトルなどは右ページ）は、民族差別のありようを冷静な分析で描き出していました。メディア賞の「子どもへの性暴力」は昨年の大賞にも輝いています。同じテーマの連載で2年連続入賞は初めてですが、報告の深刻さを受け止めたものです。学術会議問題のスクープでアンビシャス賞になった「しんぶん赤旗電子版」は初めての入賞です。政党機関紙の掲載記事ということで論議もありましたが、スクープの重さが優先されました。特別賞の北海道新聞、関口裕士編集委員は執筆記事への推薦も多く、長年の原発報道への取り組み姿勢として評価されました。

**【映像部門】**推薦は30本に上りました。賞には入りませんでしたが、「家を失い車に住む人たち」「家庭に恵まれず行き場を失った青年たち」「病気のために自分でも思いがけない動作に悩む人たち」など普段光の当たらない問題を取り上げたドキュメントに投票がありました。大賞の「報道特集」（TBS）は選考対象とされた財務省近畿財務局の職員自殺はもとより、同日に取り上げられた学術会議問題の報告内容の濃さが印象的で、日ごろのジャーナリスティックな報道姿勢が高評価されています。ちなみに活字部門の入選となった「週刊文春」の記事も近畿財務局の職員自殺の事案で、森友学園問題に対する関心は持続しています。メディア賞の忘れられた「シリア難民」はコロナ禍の下、より深刻な困難に直面する女性，子どもに焦点を絞っていました。アンビシャス賞となったHBCの「ヤジと民主主義」は当会月例会でいち早く取り上げた経緯もあります。この作品をはじめ北海道関連に題材を取った推薦作品が今回は6本を数え、道内放送局の意欲的な取り組みを示しました。（文責・山本）

**…………2020年メディア・アンビシャス大賞一覧**…………

※以下の（）内記述は映像は放送局と放送日、活字が掲載日と連載回数

**【映像部門】**

**▽大賞　　　　　　報道特集　「独自入手・森友学園問題９時間半の音声記録」「**[**学術会議問題・官邸のキーマンとは？**](http://www.tbs.co.jp/houtoku/onair/20201017_1_1.html)**」TBS（HBC　10月17日）**

**▽メディア賞****NHKスペシャル「世界は私たちを忘れた～追いつめられるシリア難民～」（10月24日）**

**▽アンビシャス賞　HBCドキュメンタリー「ヤジと民主主義～小さな自由が排除された先に～」（4月26日）**

**▽入選****ドキュメントJ「イントレランスの時代」 　　　　　　　RKB毎日（****BSTBS　4月18日）**

**証言記録　東日本大震災「埋もれた声25年の真実～災害時の性暴力～」　　　NHK（3月1日）**

**【活字部門】**

**▽大賞****現場へ！ヘイトスピーチを考える(朝日新聞夕刊　6月15-19日）**

**▽メディア賞** **子どもへの性暴力第3部「消費する社会」**

**（朝日新聞朝刊　12月3日から5回)**

**▽アンビシャス賞　「菅首相、学術会議人事に介入　推薦候補を任命せず　安保批判者らを数人」 （しんぶん赤旗電子版　10月1日）**

**▽入選　　　　　　現場へ！コロナと憲法　（朝日新聞夕刊　7月6-10日）**

**「見えない予算　一般社団法人に1.3兆円」**

**（毎日新聞朝刊　10月14日）**

 **「森友自殺　財務省　職員遺書全文公開『すべて佐川局長の指示です』」　（週刊文春 3月26日号）**

**▽特別賞　　　　 関口裕士編集委員(北海道新聞)：「核ごみ処分地 選定足踏み」（7月11日）「核のごみを考えるヒント」（9月13日）「神恵内・寿都 核ごみ説明会を終えて」(10月2日) 「核ごみ調査　動機は財政難」(同15日)など一連の原発問題報道について。**

【映像部門】以下、（　）内は受賞メンバー。敬称略

▶大賞　報道特集「独自入手・森友学園問題９時間半の音声記録」「[学術会議問題・官邸のキーマンとは？](http://www.tbs.co.jp/houtoku/onair/20201017_1_1.html)」

モットーは「現場取材」を大切に

　　　　　　　　　　　　　　　　TBS「報道特集」編集長　曺　琴袖

映像メディアの世界には激震が走っています。ネットメディアを通して誰もが取材者・発信者になり得る時代において、生き残るため、より「効率性」と数字的な「成果」を求められる風潮が高まっています。

コロナ禍では特に在宅ワークが進み、効率的な時間の使い方が急速に浸透しました。「報道特集」はその時代の流れに抗いながら、今も現場取材をモットーにしています。40年の番組の歴史の中で、当事者に現場で取材することの重みを十分すぎるほど学んできたからです。

これまでも、テレビ番組は視聴率という評価軸に縛られてきました。その中でたくさんの調査報道番組がテレビ欄から消えていきました。最近、「報道特集」の視聴率の動きに以前は無かった反応が見られます。視聴者の大きな関心事ではないテ―マでも多くの視聴者に見て頂けるのです。そうしたテーマを取り上げる番組が他にはないという「希少性」が支持される原因になりつつあるのです。番組にとっては喜ばしいことながら、映像メディア全体を考えれば薄ら寒い不気味さを感じます。

受賞した放送回は、自殺された近畿財務局の赤木俊夫さんと遺された雅子さんを取り上げました。「効率性」を優先できず、死を選ぶまでに追い込まれた俊夫さんとその死の真相を愚直に追及する雅子さんを番組は今後も追い続けます。

（キャスター：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子）

▶メディア賞　NHKスペシャル「世界は私たちを忘れた～追いつめられるシリア難民～」

困難に負けず生きる姿伝えて、自ら感動

椿プロ・プロデューサー　金本麻理子

この度は、素晴らしい賞を頂き大変光栄です。2020年1月、経済が低迷するシリア難民の現状を伝える番組を取材するためレバノンに初めて訪れました。その時、まさかコロナがこれほどまでに世界を震撼させる事態になるとは想像もしていませんでした。

レバノンでは近年、暮らしに行きづまり臓器を売るという難民までもいました。既に1日2.9ドル以下で暮らす極貧層が５０％を超える中、コロナが追い打ちをかけたのです。

空港も封鎖され私自身も出国の道を絶たれました。コロナ渦のレバノンで目の当たりにしたのは、差別や家庭内暴力、そして自殺者まで現れ過酷な現状でした。とりわけ最も弱い存在の女性と子供たちがしわ寄せを受けていました。けれども取材中、私の心に強く響いたのは、厳しい現実を前に、困難に負けまいと強く生きていこうとする子供や女性たちの姿でした。内戦から10年、ともすれば忘れられがち難民の人々の現状と共に、彼らの生きる強さも少しでも伝えることができたならば、うれしく思います。

（NEDエデュケーショナルプロデューサー塩田純、NHKプロデューサー東野真）

▶アンビシャス賞 　HBCドキュメンタリー「ヤジと民主主義～小さな自由が排除された先に～」

身近なことに目を凝らし、世界につながる

ＨＢＣ 北海道放送　報道局報道部編集長　山崎 裕侍

そもそも道警のヤジ排除問題を最初に報じたのは朝日新聞です。ＨＢＣは３番手。その後報道を続けましたが、道警は非を認めようとはせず、刑事司法も当事者の訴えを門前払いです。唯一僕らが成しえたのは、「おかしい」と声を上げた人たちの「声」を視聴者に届けたこと。メディアとして当たり前のことですが、その当たり前のことが評価されたのは、言論や表現の自由をめぐる環境が危機的状況だからかもしれません。

こうして寄稿文を書いている間にミャンマーでクーデタ―が起きました。「ヤジと民主主義」的な危機は世界中で広がっています。香港、タイ、アメリカ、ベラルーシ、ロシア、そして日本でも。ただ嬉しかったのは、テレビの制作現場にきてわずか５か月のＨＢＣの若手記者が「北海道で暮らすミャンマーの人たちが今回のクーデターをどのような思いでみているか取材したい」と申し出てくれたことです。30年前のクーデターを機に来日した男性、千歳の介護施設で働く技能実習生の女性。２人の思いを取材し、２月５日に放送しました。

「若者は自分の半径５メートルしか関心がない」と揶揄されます。しかしその半径５メートルの日常の中に世界とつながる問題があることに気が付くことがあります。権力の不正に目を凝らし、弱者の言葉に耳を澄ます。そんな報道をこれからも続けること。この受賞は僕たちに課せられた課題だと思っています。

（HBCディレクター長澤祐）

▶入選　ドキュメントJ「イントレランスの時代」

不寛容な時代に問われる報道

ＲＫＢ毎日放送　デジタル報道担当局長　神戸金史

放送界には様々なコンテストがありますが、市民が自主的に選ぶこの賞は、ほかのコンテストとは全く違う意味があります。福岡のローカル番組をＢＳ－ＴＢＳさんに全国放送してもらったおかげで、とてもうれしいです。

近年、社会の変化に強い危機感を抱いています。特にヘイトスピーチは、「人権」「言論の自由」といった戦後の民主主義的なテーゼを逆手にとって、「日本人の人権を守れ」「こちらにも言論の自由がある」と叫びます。

一方的な正義観。おそらくは、関東大震災での朝鮮人虐殺も、同じ論理で起きました。

多くの人の血と涙の犠牲の上に得た価値観は、戦後の70数年を経て輝きを失い、現代は不寛容（イントレランス）な時代に入ったと考えています。

100年前の無声映画『イントレランス』は、様々な時代の異なる不寛容を同時並行で描きました。障害者殺傷事件の犯人、植松聖死刑囚は「重度障害者に生きる価値はない」と供述しました。不朽の名作から構成とテーマを借用して、私は現代日本の不寛容を並列してみました。

ヘイトをそのまま放送したので、「これは放送として許されるのか」と驚く人がいましたが、客観報道の名の下に、差別への批判を控えたり、採り上げなかったりすることは本末転倒です。

事実（ファクト）と虚偽（フェイク）を、中立的に扱う報道はあり得ませんよね。それと同様に、「差別と反差別の“中立報道”」もあり得ない、と私は思っています。

（ＲＫＢプロデューサー児玉克浩、元RKBプロデューサー貞苅昭仁、BＳ-ＴＢＳドキュメントプロデューサー佐田正憲）

▶入選　証言記録　東日本大震災「埋もれた声25年の真実～災害時の性暴力～」

自ら抱える〝ジェンダー〟に気づく

NHK大型企画開発センター統括プロデューサー　小原美和

この度は、名誉ある賞に選んで頂き誠にありがとうございます。そして貴重な証言をして下さった方々に、改めて感謝申し上げたいと思います。放送後、想像を遥かに超える反響を頂きましたが、何より心に残ったのは、主人公の正井禮子さんについて「ご本人の名誉が回復されて良かった」という声です。阪神・淡路大震災の直後、性暴力やＤＶ被害について声を上げた正井さん達は、メディアなどからバッシングを受けました。報道によって深く傷ついた正井さん、見過ごされた被害者の方々の心情を考えると、取材者として悔恨の念に苛まれましたので、「名誉が回復された」という言葉は、何よりも重く、救いとなりました。さらに、ある男性記者からは「あの時、自分もその事実を知っていたが報道しなかったことを悔いている」という声。記事を書いても出稿できなかった先輩記者の方々からは、「今も無念な思いがこみ上げるが、明らかにしてくれてありがとう」という声も…。

今回の番組は、自分たちが内在的に抱えている「メディアとジェンダー」という課題に向き合い足元から改革していく必要性を痛感するきっかけにもなりました。埋もれていた声を掘り起こし、全ての人たちの人権や暮らしが守られるように、仲間と共に伝え続けていきたいと思います。取材にご協力下さった方々、番組をご覧いただいた皆さん、そして励みとなる賞を与えて下さった関係者の方々に、心から御礼申し上げます。

（NHKディレクター橋口恵理加、デスク伊藤弥生）

【活字部門】

▶大賞　現場へ！ヘイトスピーチを考える

かすかな叫びに耳傾けて

　　朝日新聞編集委員　北野隆一

　大賞に選んでくださり、ありがとうございます。今回の記事で初めて明らかにされた事実、いわゆる「特ダネ」要素は、ほとんどありません。それでも今回、読者の視点から記事の価値を認めていただいたことに、励まされる思いです。

　記事で伝えたいことは、はっきりしていました。なぜヘイトスピーチの問題に取り組むのか。それは、差別は人の心を傷つけ、社会を壊すからだ－－というメッセージです。

　ヘイトスピーチのデモに遭遇すると、おぞましい罵詈雑言を吐く人々に気を取られがちです。しかし今回は、差別的で暴力的な言葉を投げつけられた人たちに目を向けました。標的とされた人たちは「自分の存立を脅かされるような恐怖」に襲われ、打ちひしがれて言葉を失う。声をあげられない状況に追い込まれた人が絞り出すかすかな叫びを聞き取り、社会に伝える。そのことを今回の記事ではとくに意識しました。

　マイノリティーに対する差別の問題を取材していると、記者自身が社内外で少数派になったように感じることもありました。しかし最近は、現状の深刻さを反映してか、関心をもつ記者が少しずつ増えてきているように感じています。

　ヘイトスピーチをめぐっては、今賞の放送部門でＲＫＢ毎日放送の神戸金史さんの作品「イントレランスの時代」が入選。新聞労連ジャーナリズム大賞で川崎市のヘイトスピーチ問題に取り組む石橋学・神奈川新聞記者が特別賞を受賞しています。ともに現場で取材する記者仲間として、うれしいことでした。

＜事務局から＞表彰式のだいご味は何といっても、受賞の皆さんと会員の間で親しく交流が図れること。ところが、昨年はコロナ禍のため、表彰式直前になって中止。さて今年はどうしたものかと苦慮していたところ、ネット活用のオンライン方式というアイデアが飛び出した。北大大学院東アジアメディア研究センターのスタッフの手厚い尽力、受賞の皆さんの熱い協力があって、何とか無事に終えることが出来た。私たち会員は、受賞の皆さんのお顔を見、生の話を伺え、大感激だった。表彰式の動画をアップしたユーチューブへのアクセスも多く、新局面を開いた格好だ。さて来年は？





▶メディア賞 　子どもへの性暴力第3部「消費する社会」

当事者の理解を得てやりがい

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　朝日新聞東京本社社会部編集委員　大久保真紀

　「何かの間違い？」。受賞の連絡をいただいたときの正直な気持ちです。昨年、「子どもへの性暴力」第１部が、大賞を受賞させていただいていたからです。

　事務局の方から、昨年の受賞を承知の上でみなさんが再度、第３部を今年のメディア賞に選んでくださったことを教えていただきました。本当にありがとうございます。取材陣一同、とても光栄に感じています。

　第３部は子どもを性の対象としてみる社会側に問題があることを主眼に置いたシリーズです。そうした認識を共有していただいたことが大変うれしいです。この受賞は被害を受けた当事者の方々へ贈られたものでもあると受け止めています。

　受賞をお知らせした当事者の方からいただいたメッセージをご紹介します。

　「今でも自分の身に起きたことを思い出す時は必ずあります。あまりに多い被害に思わぬことで過去の傷をえぐられる時もあります。それでも負けないでいたいなと今は思っています。蓋をして触れずに生きていく方が楽なのかもしれません。きっと楽だと思います。でも今逃げたら同じ思いをする人が増えるだけ、一番嫌いな加害者に加担してしまう気がして、やっぱり逃げたくないと思いました。鬼滅の刃みたいに鬼がいない、犯罪が消える社会は来ないかもしれないですが、せめて被害を受けた人を全力で守り、擁護する社会にはしたい。その為には、被害者がどれほどの地獄をみてきたか、その現実を真っすぐ伝え、正しく理解してもらうことが大切だと思っています。こうして出会えたこと、そして被害者の叫ぶような声を届けて下さったことに感謝しております」

　今後もシリーズを続けていきます。引き続き、よろしくお願いします。

（朝日新聞「子どもへの性暴力」取材班：西部本社報道センター次長　泗水康信、大阪本社生活文化部　小若理恵、西部本社報道センター　山田佳奈、東京本社社会部　塩入彩、東京本社社会部（当時）　林幹益、名古屋本社報道センター　山崎輝史）

▶アンビシャス賞　「菅首相、学術会議人事に介入　推薦候補を任命せず　安保批判者らを数人」

あらためて感じるジャーナリズムの使命

しんぶん赤旗社会部長　三浦誠

　日本学術会議の会員任命拒否は、菅義偉首相の強権体質を象徴する事件です。「しんぶん赤旗」は2020年10月１日付の１面トップで菅首相による任命拒否を報じました。菅氏が首相に就任したのは、このわずか半月前です。

　一般に新政権発足後、１００日間は「ハネムーン期間」と呼ばれ、メディアが政権批判を控える傾向があるとされます。実際に、パンケーキ好き、秋田の農家出身で苦労人、という好意的なイメージが流されていました。

　他方、「赤旗」は菅氏の首相就任後、官房長官時代に人事で官僚機構を支配してきたことに注目し報じていました。

　そんな中で、キャッチしたのが菅首相による学術会議会員の任命拒否という情報です．私は社会部の部員に「任命拒否は、菅氏が首相になって初めて明らかになる恣意的強権的な人事です。菅政権の本性を暴く取材です」と伝え、取材を始めました。

　あわせて重視したのが、「学問の自由」を脅かす問題だという視点です。戦前戦中に学問、科学が戦争に協力させられた反省から、学術会議は政府から独立して職務を果たす期間として設立されました。菅首相の任命拒否は、独立性を掘り崩し、研究活動への萎縮に繋がります。

　首相による強権的人事や学問の自由への介入は、民主政治の根本を歪めます。これを許さないため政権の監視、告発を続けることがいまジャーナリズムに求められています。

（学術・文化部長　西沢享子）

▶入選　現場へ！コロナと憲法

人間の尊厳を読者と共に考える

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　朝日新聞編集委員　豊　秀一

かつて経験したことのないコロナ禍の中で様々なことがおきました。そこに「憲法」というレンズを通すと何が見えるのか。入選作品に選んでいただいた「現場へ！　コロナと憲法」の狙いです。個人の尊厳、生存権、表現の自由、両性の平等、緊急事態の五つをテーマにしました。

　例えば、「生存権」の現場は日雇い労働者の街、大阪・釜ケ崎。３６歳で憲法学者の職を捨て、移り住んだ遠藤比呂通弁護士と街を歩きました。１０万円の特別定額給付金は住民票があることが条件。しかし、目の前に住民票がない野宿者たちがいます。しかも、大阪市は２００７年、釜ケ崎解放会館などに登録していた日雇い労働者ら約２１００人の住民票を「居住実態がない」として一斉に削除していたのです。住民票削除処分の取り消し訴訟が起こり、遠藤さんは代理人を務めましたが、最高裁で敗訴が確定しました。

　１３年前の住民票削除事件と、住民票がないことを理由とした今回の特別給付金の不支給。遠藤さんはそこに、国家と裸で対峙させられてきた野宿者の姿を見ます。記事は遠藤さんの言葉で結びました。「コロナ禍が教えるのはだれもが弱い立場に置かれかねないということ。人間の尊厳とは何か、そこから『健康で文化的な最低限度の生活を営む権利』を定めた２５条の生存権の意味を問い直してほしい」

　憲法とは何か、読者とともに考える記事を、受賞を励みに書き続けていこうと思います。

▶入選　「見えない予算　一般社団法人に1.3兆円」

反響の大きさが記者の本懐

毎日新聞経済部副部長　三沢耕平

　国の予算は国会で成立した後、適正に執行されているのか？　今回の記事の端緒は、民間委託を巡る不透明な実態が問題となった持続化給付金事業の取材課程で抱いた素朴な疑問でした。

　「官から民へ」の流れの下、国の予算執行を担う社団法人は急増しています。しかし、社団法人には最低限の公告義務をのぞき、予算の使途を説明する法的責任がありません。納税者が税金の行方を知ることができない「見えない予算」の存在は、財政民主主義の精神に反するという強い問題意識の下、政府の行政事業レビューシートを分析しながら約２カ月にわたって関係者の取材を続けました。

　社団法人から企業などへ再委託を繰り返す予算の行方を追う作業は難航しましたが、予算の可視化を目指す学者や国会議員、公益法人制度改革に携わった専門家など、我々と問題意識を共有する人たちの協力もあって記事化することができました。「今まで知らなかった実態に驚いた」「よくぞここまで調べてくれた」。読者から届いた多くの反響に、記者の本懐を遂げた思いがしました。

　経済部記者は予算の規模と内容をいち早くスクープする競争に陥りがちです。しかし、そうした情報はいずれ当局によって発表されます。ネットメディアの台頭で新聞のあり方が問われる中、毎日新聞経済部はそうした「発表前報道」とは一線を画し、時が来ても誰も明らかにしてくれない事実を発掘することで社会に貢献する公器としての存在意義を発揮していこうと誓い合ったところです。今回の受賞は、そんな我々の新たな目標と指針を後押しするものであり、受賞に恥じない取材活動を続けていく決意を新たにしております。

▶入選　「森友自殺　財務省　職員遺書全文公開『すべて佐川局長の指示です』」

大阪日日新聞記者　相澤冬樹

▶特別賞　長年に及ぶ、一連の原発問題報道に対して

矛盾や先送りの政府、東電を見続ける

北海道新聞編集委員　関口裕士

　東日本大震災と東京電力福島第１原発事故から１０年になります。それ以前から原子力を取材していたので私の原子力取材歴は１０年以上になります。東京から札幌に異動したのが２０１１年３月１日。直前まで取材し送別会も開いてくれた東電の社員が原発事故後、被災者に土下座している姿をテレビで見て、心が張り裂けそうになりました。思い出すと、今もつらいです。

　原子力の取材を続けてつくづく感じるのは、電力会社も政府も、矛盾や取り繕い、先送りだらけだということです。そのツケが凝縮されているのが、使用済み核燃料から出る高レベル放射性廃棄物（核のごみ）の問題だと考えています。

　昨年、北海道の寿都町と神恵内村で核のごみの最終処分地を選ぶための調査が始まりました。北海道新聞はその動きをスクープし継続して手厚い報道を続けています。今回の特別賞は道新の仲間たちとの共同受賞だと思っています。ありがとうございました。さらに読者に考えるヒントを提供できるよう、受賞を励みにして頑張ります。

　私は今も毎月のように福島に通っています。「１０年」の後も通い続けるつもりです。福島第１原発の廃炉は東電や政府の説明でも３０～４０年かかります。核のごみは放射能が安全なレベルに下がるまで万年単位の時間がかかります。核のごみはもちろん、福島の廃炉さえ、私たちは見届けられるか分かりません。でも、見続けられる限り、見つめ続けようと思っています。

報道現場の声に触れる醍醐味

オブザーバー会員　飯島秀明さん　＜フェイスブックから転載＞

６日は、札幌を中心に、報道の充実に向け、メディア批判ではなくよい記事・放送を市民の立場から顕彰するという取り組みを続けているグループ「メディア・アンビシャス」（代表、上田文雄＝前札幌市長）の、2020年大賞表彰式。オンラインでしたが、大半の受賞者が、ビデオメッセージを含め、声を聞かせ、今後への意欲を語ってくれました。

受賞作の中で個人的に印象に残ったのは、毎日新聞社さんの「見えない予算　一般社団法人に1.3兆円」（10月14日朝刊）と、ＮＨＫさんの証言記録　東日本大震災「埋もれた声25年の真実～災害時の性暴力～」（3月1日）、朝日新聞さんの「現場へ！ヘイトスピーチを考える」(６月15日～19日)の３作。

「見えない予算」は、財政民主主義の問題といったらいいのか、例えば、国家予算が、実際に執行する電通や財団法人にわたると急に不透明になる、という問題に切り込んだキャンペーン。私自身、市町村の事業は市町村議会で細かく論議されるのに、国の出先である北海道開発局、さらにその出先である開発建設部レベルの事業になると、通常は検証の対象とされておらず、とたんに取材がしにくくなるという経験がある。税金を取られるのには敏感なくせに、使い道には無頓着な、主権者としての自覚を欠く傾向のある日本人だけに、重要な切り口の問題提起だと感じる。（次ページへ続く）

ＮＨＫさんの「埋もれた声25年の真実～災害時の性暴力～」では、統括プロデューサー小原美和さんの言葉が強く印象に残ったので紹介したい。

「災害と人権という観点から、どうしても世に送り出したいと思っていたテーマだった。勇気を持って、あらためて証言してくれた皆さんの言葉があったからこそ。放送後、想像をはるかに上回る反響があった。中でも一番心に残ったのは、放送を通じて、主人公である女性の名誉が初めて回復された、という声をたくさんいただいたこと。阪神淡路大震災の時にこの問題について声を上げたときは、メディアから激しいバッシングを受けた。『災害でこれほど大変な状況の中で、性暴力なんてあるはずがない』『デマを流すな』と何度も言われ、深く傷つき、それ以降、ほとんど声を上げることがなかった。今回あらためて証言してくれたことで、放送によって名誉が回復されたと多くの人が喜んでくれた。そのことに、私たち自身も救われた。メディア関係者からもたくさんの共感の声をもらった。ある男性記者からも『実は当時、自分自身もそれを見聞きしていたにもかかわらず、報道できなかったことが今でも悔やまれていた。本当にありがとう』、多くの女性ジャーナリストからは『以前から記事にしたかったが残念ながら通らなかった』と聞いた。実はＮＨＫでも、仲間たちが何度も企画書や記事を書いたがなぜかその時は通らなかった。私自身、当事者の方々に謝罪の気持ちを込めて企画書を書いた。この問題には、メディアとジェンダーという問題が横たわっていることを強く感じた。あらためて自分たちが抱えている問題を足元から変えていかないといけないということを痛感した。関わってくれた皆さんに感謝し、これからも地道に埋もれた声を拾い上げ、伝えて行きたい。」

被災者が加害者に転じる被災地での性暴力。支援物資を見返りとした「対価型暴力」などという言葉も、ＮＨＫの番組紹介ＨＰに書かれている。「デマを流すな」というバッシングは、二重に被害を受けた被災者をさらに傷つけただろう。そういった意味で、勇気ある声を伝えず、バッシングしたことは加害だ。このことは胸に刻んでおきたい。

「現場へ！ヘイトスピーチを考える」では、朝日新聞編集委員　北野隆一さんが語ってくれた。

「九州での部落問題、在日の問題などを通じ、差別の問題を考えてきた。20世紀の遺物だと思っていたが、最近になってから再びひどくなってきている。差別の問題取材、考えるようになったのは、マイノリティーとマジョリティーの違いは何かということ。マジョリティーというのは、自分のアイデンティティー、属性について考えなくて済む、自分はこういう人間だということに疑問を抱いたり、説明を迫られたり、そういうことをしないで済んでいる人たち。逆に言うとマイノリティーというのは絶えずそういう説明を求められたり、自分が何ものであるかということを考えさせられたり。そういう不均衡がある。それを少しでもよくするにはどうしたらいいか。マジョリティーに向かって、マイノリティーはこういうことで困っているんだ、こういう目に遭っているんだ、こういうことを訴えたいんだ、というところを、声上げている人たち、上げられない人たちも含めて、その声を伝える助けに、報道がなれば。気付かない、あるいは見て見ぬふりをしていたマジョリティーが気づいて、考えるようになってくれればいい。差別というのは、マイノリティーの問題ではなく、マジョリティー、日本社会の問題なのだから。」

マイノリティーだけがアイデンティティーを問われる、ということは、アイヌの人たちと関わる中で日々感じてきた。和人による侵略の前から北海道に住んでいたアイヌでさえそうなんだから、強制的に連れてこられたり、朝鮮半島で生活の基盤を奪われるなどの理由で日本に渡ってこざるを得なくなった在日の人たちは、歴史を学ぼうとしない日本人から常に「なぜ日本にいるのか」と突きつけられているのだろう。それは「不均衡」と言うより、言葉の刃のようなものだと思う。マイノリティーに生きづらさを強いているであろう、この決定的な「不均衡」についても、考え続けていきたいと思う。

※受賞感想などの見出しは事務局で付しました。